

持続可能性の倫理に向けて—環境に関する意思決定の基礎としての 身体包含的自我

ドロズ ライナ

キーワード：環境倫理；身体包含的自我；環境的意思決定

本論文の目的は、地球環境危機をもたらしている支配的な経済諸観念の根底にある、経済人という自我観に対する代替案を提示することである。自我観は日常生活における環境に関する倫理的ジレンマについての意思決定過程に影響している。そのため、どのような自我観が個人の持続可能なライフスタイルをよりいっそう促進するかが問われる。独立かつ利己的という経済学的自我観と、客体化可能な資源という経済学的環境観が目下支配的であるが、これらは文化横断的・学際的な諸観念と対立する。第一に、共感による間主観性と身体包含的認知を通じて、環境・他者と相互依存関係にある身体化された自我という観念が、認知科学の方法によって探究される。第二に、自己理解は、行為遂行的な対話的構築として、環境的な自己解釈と語りの発達のための有効な手段であることが示される。

持続可能性の理論化に対する障害は、環境に関する個人の意思決定を一層複雑なものにしている。その障害とは、内在的な不確実性、空間的距離の問題、時間的距離の問題であり、行為者と被害を受ける人間または自然との間の共感および対話の可能性を低くする。本稿は、和辻哲郎とオギュスタン・ベルクに基づき、グローバルに共有されている、地球という歴史的風土に住む関係的個人という概念を提案する。そして、この概念は、上述の問題のいくつかに解決策を提供することができるかと論じられる。関係的個人にとって、自我は、身体化された、関係的な、風土に属した存在であり、絶えず自分自身を構築し続ける。倫理は、人間の適応能力と生存および世界への貢献を促進する手段として、自我とその風土との間の交換のサイクルから出現する。環境的意思決定の段階として捉えることにより、この身体包含的で関係的な自己の概念は、自己の歴史的風土との本質的な内在的関係の認識を通して、持続可能性の倫理に基盤を提供する。